

## <自己の問いの歴史>

### ①デカルトの『省察』にみられる自己の問い

「一生に一度は全てを根底から覆して最初の基礎から新たに始めねばならない」

“自分の力で獲得した知識” などというものはほとんどなく、先人の業績という裏付けしか持ち合わせていないという自分の知的な不誠実さに気づいてしまった。

### ②その「問い（気づき）」にデカルトはどう対処しようとしているのか

自分の思想（＝自己・世界に関する信念）を全面的に取り壊す。

つまり、「全く確実で不可疑」ではない思想に関しては「明白な虚偽」どのように同意を差し控える。

（＝確実な真実でないものを一度括弧に入れてしまう）

## <さあ、疑ってみよう！>

### ①夢の懐疑とはどういうものか

「SはPである」という夢である可能性を排除できないということ。

夢は目覚めてから分かる事後的なものであるから、「今起きている」と思うこと自体が夢かもしれない。

### ②ego sum, ego existo(私はある、私は存在する)という命題は如何なるときに確実か

それを私が言い表すごとに、或は精神で抱懐するごとに必然的に真となるのであって無条件に確実ではない。なぜなら、「私はここに存在する」という言葉だけが残ることがありえるから。だから、その言葉が確実なものとなるためには常に言い表されていなければならない。

### ③『第二省察』においてデカルトは「ego cogito, ego sum」という認識は一切の認識のうち誰でも順序正しく哲学する人が最初に出会う最も確実な者である」と述べているがこれはなぜか

思惟するものが思惟しているそのときに存在しないのは不合理であるから（『哲学原理』）

つまり、「私が存在しない」という命題は思惟を表明する主体が思惟の内容で否定される自己矛盾。

自己言及の現場そのときに自己存在の確実性が知られている。T<sub>1</sub>時の自己言及はT<sub>2</sub>、T<sub>3</sub>、T<sub>4</sub>、T<sub>5</sub>時点での自己言及とは断絶している。T<sub>x</sub>時点での確実性でしかありえない。

## <方法的懐疑>

方法的懐疑の目的は知の基盤を獲得することである。そのために疑えるものは全て疑っていく。

### ①デカルトの行った懐疑について述べよ

「夢」の懐疑：過去から現在にわたる様々な世界事象を疑っていく

「欺く神」を想定した懐疑：“2 + 3 = 5”というような理念的な知(論理操作)を疑うべく、論理操作を行う自らの頭が「欺く神」によって惑わされている可能性を考える。（2 + 3 = 5などというものは、実験の結果ではなく頭の必然的な使い方であり、ア＝プリアリな知識）

## <「私は存在する」という命題の特異性>

### ①「私は存在する」という命題を疑えないのはなぜか

イ)「私は存在しない」という命題は存立不可能だから。

一般的な話から。

{主語}は〇〇である という形の命題は {主語}は(実は)〇〇でない という。

これは、主語が「何であるか」を記述する(=事象内容に関わる)普通の述語(カント的には **real** な述語)に一般的に言えることである。

ここでの問題について

実在 **existence** は **real** な述語ではない。「〇〇が存在する」は純粋な語りの場を指定しているに過ぎない。

例：ユニコーンがいる。←語りの場の指定(定立)、ユニコーンが存在する世界を定立する言葉

↑

これがあって初めてユニコーンについて、それが何であるかの話ができる。

「私は存在する」という文を書いている段階で語り手の存在が指定されているのであり、思惟するものが思惟するそのときに存在しないことは不合理である。

ゆえに、**ego cogito, ego sum** という認識は最も確実な認識であるといえる

## ②①におけるデカルトの議論に反論せよ

①においてデカルトは「矛盾したことは言ってはいけない」という論理学の形式に従っている。

つまり、「矛盾律」が証明手段として前提されているただの推論なのではないか。

(P ゆえに Q という推論の前提規則として矛盾律がある可能性)

## ③では、①とは異なる考えかたについて説明せよ

ロ)「**ego cogito, ego sum** という命題は推論ではない」

第二省察,第九段:

私は光を見、音を聞き、熱を感じている。けれども私は夢をみているのだからこれらは虚偽である。

しかしなが、見ている、聞いている、感じていると思われるそのこと自体は虚偽ではありえない。

“見ているもの”は幻影かもしれないが、“見ていると思われる”ことは疑えない。(ここでは、“見ている”と“思っている”主体が同一であることがポイント)

心の作用が心の作用自身に触れている「感覚の自己触発」がここに起こっている。

自己触発というのは気づいているものと気づかれているものが表裏一体(自己同一的)であるということ。通常ならば“感じるもの”と“感じられるもの”の二者が存在するものだがここにはない。

この自己触発によって「私の存在」は確保されているのである。

cf.カント

『プロトゴメナ』: 私とはある純然たる存在感情(←とするならば、私の存在は感じるしかない?／推論ではなく直感的な感情としての、もしくは体験の実質としての私)

## ④通常存在とデカルト的夢の懐疑の相違を説明せよ

### ・通常存在

「Xが存在する」→この同一のXに対して複数のものがアプローチできることが前提。

私もあなたも君もあの人も見る OR 感じることでできる X

### ・デカルト的夢の懐疑

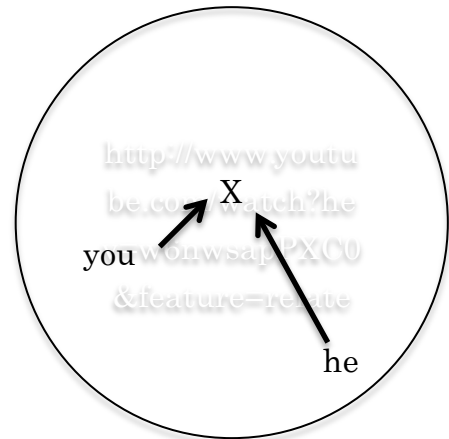
何が見えようが「私の夢かも・・・」と疑っている。ただ私一人が証人であるような事柄の「存在」が問題になっている。／**mihi videor**, 私が見ているのでしかない事柄。

この両者の次元の違いには十分に注意すること。

デカルトは右図のような舞台設定そのものを問題にしている  
この舞台というのは、

私が彼ら、あなたと対話をする舞台。

これをあらゆる探求の前提として確認したいということ



「日常的な意味で『存在する』と語られるあらゆるもの」が  
そもそも語りうるようになるための舞台の成立を  
問題にしている。

デカルトがつくろうとしているのは全ての存在の基盤となるもの。

「見ている私が確かにいる」とすることで「自己の存在」の確立を目指す。

## <ヴィトケンシュタイン>

『論理哲学論考』

5-6 3 1 : 思考し表象する主体は存在しない (=デカルトとは真逆!!)

(イ) 『「私」が見いだした世界』という一冊の本を私が書くとするればその中では私の身体についても報告がなされ体のどの部分が私の意思に従い意のままになり、どの部分がそうでないかなどが語られるべきであろう。

(ロ) これはすなわち主体を孤立させる方法、あるいはむしろ重要な意味において主体が存在しないということを示す方法である。すなわち主体についてだけはこの本の中で話題になることがありえない。

5-6 3 2

主体は世界に属さない。それは世界の限界である。

① (イ) を実行しようとするとなんになるか

当然ながら私自身(A)は私が見いだした世界の外側にいる。

ここで、私(A)を描写しようとする、

『私(A)が見いだした世界』を書いている A を、

『私(X)が見いだした世界』に書き込む X という存在が必要になり、これはキリがない。(累進的構造)



② (ロ) はどういうことか

①で見たように、存在するもの（私が見た世界）をどんどん書き加えていく私自身はそのリストに書き加えられない。

だから、ある意味で書き込めない→存在しない

③①、②を踏まえると私の生とは一体何か

「存在するもの」を「存在するもの」として承認し、登録していく存在論的経験の歩みが私の生。  
しかし、その歩みを私は対象化することはできない。だから、私の生は存在しないものとして生成される（＝  
ヴィトケンシュタイン的には世界に属さない）。これは、写真を撮る人自身は写真に写らないことに似てい  
る。

cf. ウパニシャッド哲学

「見ることの背後にある見る主体をあなたは見ることができない」（聞く、思考するも同様）  
古代インドの概念における自己はアートマン。自分のアートマンは万物に内在しているのだが、非ず（見る  
ことができない）という表示句で間接的にしか示すことができない。

簡単にここまでをまとめ

デカルト：風景が夢でも、それを見ている「目」は存在しているはず  
ヴィトケンシュタイン：風景を見ている「目」は風景（＝存在）に現れない。

### <「人格 person」としての自己意識>

ヴィトケンシュタイン的世界：「世界」で何が起ころうとも世界は世界、私は私（形式的構造）

person の定義

a thinking intelligent being, that has reason and reflection, and can consider itself as itself, the same  
thinking thing, in different times and places.

#### ①波線部に特に注目して「人格」について述べよ

時と場所を超えて自己同一性を保っているのが「人格」

→だからこそ、人は裁かれる（賞罰の正当性の根拠）

→現在の存在を超えて過去へと自分自身を拡大していく

身体そのものの同一性よりも「記憶」を通じた同一性の意識の方が強いと言えるだろう。

時間と場所の移り変わりを通じた自己同一性の意識。「記憶」が残ることで同一性は保証される。

責任を負うということはそもそもどうということなのかという倫理的な問いへの回答として人格を定義した。  
ちなみに責任というのはこれまでして来たことに対する責任。

「あの時自分がしたことは…」と「記憶」という昔から現在にわたることに人格を依拠させるのである。

#### ②同一性が保証されるのは如何なる場合においてか

時間と場所の移り変わりを通じた自己同一性の意識。「記憶」が残ることで同一性が保証される。

#### ▷モデルとしての「最後の審判」

最後の審判というのは、過去に行われた一切のことについての裁き。

パウロ：最後の審判の日、全ての人がその行いに従って報いを受けるとき、全ての人が行いに従って報いを受けるとき、  
全ての胸の秘密は明らかにされるであろう。そして、この裁きを正当化するのは全ての人格が持つ consciousness(意識)  
であろう。

#### ③それでは「行為」を「行為」として成り立たせているものはなにか

ロックは「行為」には意図がつきものだとした。

しかし自分が今何をしていることになるのか本当は分からないという問題が脇に置かれている。  
自分の行動が本当は人を傷つけているかもしれない。

#### ④「行為」をどう考えるのか

行為は必ず人と人の間（＝社会的空間）で生まれるものである。

行為と対比されるのは出来事であるが、行為だけが **Self-Knowledge** を伴う。

自分が何をしているのか、またそれをなぜしているのかについて、観察に頼らない内側からの観察があるか。

**H.Arent**：結果の予測不可能性が行為にはある。また、もの作りなどとは違って行為には完成予想図に基づく終わりが  
ない。このような人間を許すには、何を作る(**what**)かではなく、**who** で認めることが必要。

再びロックに戻る。

#### ⑤ロック的な **consciousness** とは何か

「裁き」を正当化するのは、自分が自分自身に対して隠しておくことのできなかった何か。

自分が自分自身から逃れられないという事実の神話的象徴が「最後の審判」？

#### ⑥キルケゴール『死に至る病』、「絶望」とは何か

どうなろうとも私は私であるしかなく、「死」という最後の希望もないほどに絶望している状態。

絶望というと一見外的な何事かについての絶望があるようにも考えられるが、「本当は自己から抜け出した  
いとどんなに願っていても決して抜け出ることができない」ということが絶望の本質ではないのか？

#### ⑦ニーチェはキリスト教的 **consciousness** を批判

キリスト教的な「良心の疾しさ」は、苦しませることの悦びのために自己を苦しめる「自分自身に向けられ  
た残虐性の本能」であり、倒錯的。

▷上に見られる「一人称性」の煮詰まりは何を意味しているのか？

キルケゴールの「絶望」論を例にとるなら...

自分は、自分自身から抜け出せないという根本事実がある。この「自分はどうしても自分」ということを  
直視せねばならない。(一人称性＝自分は自分であることをやめられない)

一人称性はなにもキリスト教文化固有の問題ではない。

「恥」という概念

命長ければ辱多し (『徒然草』)

今まで生きてきた生活において恥を晒して来た自分と、今ここにいる自分との同一性。

その生涯の記憶と「恥」の意識との分ちがたさ

こんだはこたにわりやのことばかりで／くるしまなあようにうまれてくる

今の人生では「自分はあくまでも自分」、自分のことばかりで悩み苦しみの回避は避けられない。

#### <「私の生涯」という物語>

「私の生涯」 — 一人称的なもの / 自分にとってしか意味のない仕事で悩み苦しむのをニーチェは不毛と考えた。  
人間は、その精神構造において「自分の生涯」を意味あるものにしたいという欲望を持つ。そこで「自分の生涯」を全  
体とし、それを「死」という終わりから捉えるまなざしを獲得する。

①ハイデガーの「存在と時間」における彼の主張を述べよ

相互の代理可能性に基づいて成り立つ日常的な社会生活とは異なり、「死」は本質的に代理可能性が全くない「そのつど私のもの」である。だから他人は私の「死」に居合わせる程度のことしかできず、それぞれの「私」はそれぞれのやり方で「私の死」を受け入れなければならない。

②①にみられるハイデガーの主張に対する反論を述べよ

代理不可能なのは果たして「死」だけなのだろうか。各自に関わる生理的過程は代理不可能ではないか。

③『存在と時間』でハイデガーが問題にしていることを述べよ

現存在(Dasein)ではなく実存(Existenz)。我々各人の存在の仕方。つまり自分の存在において、自分自身の存在に関わることがもんだいであるようなあり方。

④ハイデガーのいう「実存」について述べよ

実存は本来性(Eigentlichkeit)と非本来性(Uneigentlichkeit)に二分される。

前者は、自己固有の存在可能性(＝死に関わる存在であるということ)に基づいて自己を了解する実存モード

後者は、世界(＝世間、世俗の社会)の言説、解釈コードの方から自己を了解する実存モード。

後者の方が我々にとって日常的で、「あの人は〇〇大学の学生だから…」などよく言う。世間はこう言っているかに重点が置かれる。この非本来性に基づく見方に慣らされている私たちであるが、最後には誰にも変わってもらえない「自分自身の死」を受け入れなければならない。

⑤「自分は『ここに息づくこの身体』のもとにいる」(＝全ての世界経験に先立つ基盤)という考えから生まれるものは何か

この考えは、「複数の身体各々における生命過程は互いに相対的に独立している」ことへの了解へと転ずる。

その了解の下では、それぞれの問題がそれぞれ自分のものとして迫ってくる。

さらに「他の場所を占める生命」である他人と自分は別だと意識される。

⑥複数の身体各々の歴史を構成するものはなにか

成長：相対的に独立した交換可能なストーリー

記憶：個別的なもの

学習：～ができる、～をする

⑦自己の行為の歴史・物語はどのように形成されるか

where/whom/when/how といった事柄は言語化され他者と語り交わしできる。そうすることで「自分の生涯がどのようなものであったか」についで記憶が固まっていく。

各々の「私の生活」の記憶・物語が互いに交換できない自己固有のものとして成熟していく。

別の言い方で言うと...

「私はこの身体の下にある」という根本事実が時間的に継続することによって、日々の事実が積み重なり、それぞれの身体の経歴ができ、物語的な自己了解につながっていく。

ノート回の裏をもう一度チェック

“この生涯は他でもない、「この私の」生涯である”という事実が厳然と存在する。この事実を他の誰かと交換することは無論できない。生涯の終わりの近づきを感じると生涯全体を気にするようになり、この事実全体の意味を理解したいという欲望が生まれる。しかし、それは大変困難なことである。

▷生の意味の欠如という苦しみ

①ニーチェの見つけた問題点とは何か

『道徳の系譜学』末尾：人間にとって耐え難いのは苦しみそのものではなく、苦しみが無意味であること。  
「意味」でしか現実を肯定できないことが人間の問題。

▷「無意味な生」と「老い」の結合

チェーホフ『ワーニャ伯父さん』：「くだらないことに消費」「自分の一生はもうだめだ」「取り返しがつかない」  
「もうやりなおせない」という意味で現実を理解している。

①人間の根源的な欲望とは「再び何かを始める」ことと考えたときの若さと老いを説明せよ

若さ：新たに再び始める力と結びつく

老い：変更不可能な過去から自分の人生を再構築するよう強いられること

前述の『ワーニャ伯父さん』においては、ソーニャがワーニャの嘆きを聞くことで彼の気持ちは静まる。  
ソーニャが指し示すのは私たちの嘆きを聞く「神」という聞き手なのだろうか...

person:人格

自分自身を自分自身として「認める」。そのときに認めているのは「私の生涯」という物語であったりする。  
この物語はクニの物語、土地の物語、一族の物語と連動している。  
自分は何者なのか、どこから来てどこへ行くのか、今どうしたら良いのか、何をすべきなのか

▷普遍的な問いの源としての不知

「知らず、生まれ死ぬる人、いつかたより来たりていつかたへか去る」(『方丈記』第一段)

「我々は誰だったのか、我々は何になったのか、我々はどこに行ったのか、我々はどこに投げ込まれたのか、これらについての認識(＝グノーシス)こそが我々を解放する」(キリスト教、2c ごろ、グノーシス主義者)

『あなたがたは新たに生まれなければならない』とあなたに言ったことに驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いてもそれがどこから来てどこへ行くかも知らない。霊(＝プネウマ：風、息吹)から生まれた者も皆その通りである。』(『ヨハネによる福音書』)

生きとし生けるものは風のようなもので、どこから来てどこへ行くのかわからない。(気まぐれ)

①思いのままに吹く風という現実が我々にもたらすものは何か

我々はどこから来てどこへ行く？という自己の存在の理由・意味を問い続ける。また、自分は何を最後に受け入れなければならないのかということも。

この“わからなさ”に対するある種の説得(答え)となりうるのが物語である。

オルフェウス教：人生において魂を浄化しないと天空に戻れないという物語を作る。

自然主義：一切の物語を「自然現象」として無効化(＝反物語という物語)する。「存在するのは

物理現象のみ!」、脱物語を自称するコスモロジー。

②『ヨハネによる福音書』の「新たに生まれる」とはどういうことか

自己了解の枠組みとしての物語を新たに編み直すべく促されることの不可避性。

思いのままに吹く風によっていったんゼロになったところから新しく生み直していく。

前述のワーニャは47歳で全てを失うことで自己了解のフレームを生み直すことを求められている。人はブネウマの息吹を自分に感じる事ができる限り、新たに生まれ直すことが出来るのである。

▷物語を「語る」ということ

①「語り」は何を示唆するか、例も挙げて説明せよ

「語り」は聞き手の存在を示唆する。

『こころ』において

人は自分がどのようにして一生を生きてきたかということを覚えて欲しいものである。

たとえどんな生涯であっても人は自分の生涯の痕跡をこの世に残すことを願う。

<呼びかけと応答>

W.Humboldt の考え：言語活動は人間の必須条件であり、どんなに孤独でも言語活動抜きにものを考えられない。

しかし純粹で一人で考える事はできず、それは外見上一人になっているときでも同じである。どういうことかという、一人でいるときにでさえ他人にどう自分の言葉が受け取られるかということを考えている。

1) 君への憧れ

人間は他人に宛てた自分の言葉の理解可能性を吟味することによってのみ、それ自身を理解する。

というのも物事の客観性が高まるのは自らの造形した(発した)言葉が他人の口から再び響いてくるときだからである。

①イについて説明せよ

フンボルトの議論は自分自身を表現する言葉が他人にはどう受け取られるのか、自分と聞き手の関係を考えている。フンボルトの言語思想には前述したように「言語なしに人はものと考えられない」というものがあり、彼は「人は自分が何を考えているのか語る前から理解しているのではなく、語って初めて自分の思想を知ることが出来る」と考えている。

これはつまり「語りによる思想形成」であり、「人は頭に思想があり、それを口を使って発音するだけ」とする考え方とは大きく違っている。

②ロについて説明せよ(ロは何について述べているのか)

ロが述べているのは『客観的』な世界の中に自分が存在していることの確信を我々は如何にして得ているか。そして、我々はその確信を他者との対話によって得ている。

私「花が咲いてるね」

A「うん、咲いてるね」

といった何気のない会話にも「他人(=話の発話に居合わせた聞き手)の口からの反響」があり、この他人との対話の中で世界が構成される。

全ての言語活動というものは二者が交互に語る対話に基づいている。そのため言語の根源的本質のうちには不変の二元論が潜んでいるのであり、言語活動の可能性そのものが呼びかけと応答によって条件づけられている。



だからこそ人間は自らの単なる思考のためだけでも私に呼応してくれる君への憧れを抱くものなのである。

↑

聞き手として私の発話に居合わせる二人称

物語のリアリティは私一人では作り上げられず、対話的に作られる⇒自分の共鳴者を探す。

(自分の言葉の反響を得ることでリアリティを獲得する)

※「花が咲いている(There is a flower.)」の is は三人称性 (夢なら一人称 am になってしまうだろう)。

しかし、この is がリアリティを持ちうるのは他人がいるからこそ。

▷ブランショ『終わりなき対話』

「どうしてただ一人の語り手ではただ一つのことばでは決して中間的なものを名指すことができないのだろうか？それを名指すには二人が必要なのだろうか？」

「そう、私たちは二人いなければならない」

「なぜ二人なのだろう？どうして同じ一つのことを言うためには二人の人間(語り手)が必要なのだろうか？」

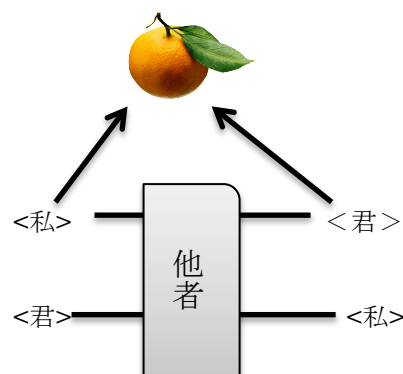
Why two speeches are needed to talk about one thing?

「それは同じことを言う人は常に他者だからだ」

|一人称の内面に留まらない語りが外に飛び出し、また自分に帰ってくる。|

①ブランショの考え方を説明せよ

“どうして同じ一つのことを言うためには二人の人間(語り手)が必要なのだろうか？”＝複数的パロール(語り)  
複数的語りとは<私>によって語られたことが A<他者>によってもう一度繰り返され、それによって本質的な“差異”のうちに差し戻されるような独特のパロール(語り)のことである。こと対話の特徴づけているのは二人の<私>、一人称で語る二人の人間の交換というだけではない。そこでは語りの現前を通じて B<他者>が語っているということである。



花という同じ言葉が響いたとしても、それは自意識が言い合っているだけではなく、そこに他者が出現している。

ものが存在するためには<君>が必要なのはフンボルトも示したが、ブランショが言っているのは「フンボルトが<君>というときそれは何者なのか、もう一人の自分なのか？」ということ。

フンボルトの言う「他人の口からの反響」とは「私の言葉のエコーにすぎないのか」

もしエコーに過ぎないとするのなら、フンボルト的な憧れは単なるナルシズムになるのではないか。(ものの名前を呼ぶ自分の声にただ聞き惚れているだけだから)

そんなもので三人称性（世界の客観性）を獲得できるのだろうか。

### ③②の解釈の仕方を説明せよ

（１）人はどのように言葉を学習するかという問題に即して

私→→→→↓  
→→→花  
赤ん坊→→→↑

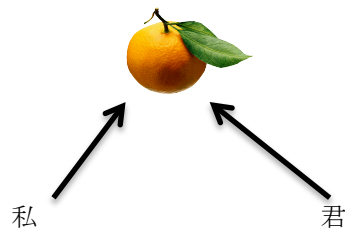
親に言葉を習う赤ん坊は、音声を持って対象を指差すようになる。（「○○ちゃん、アレが花よ」）成長して花を指差すときでも、原体験として親と共に指差した経験があるので、それを思慕せざるをえない。

では、成長したときに親の位置にいる「他者」とは何者か。

▷物の名を名として創始した他者

個人史においては親のようなもの／個人史を超えて例えば初めに花を花と呼んだ人。

「三輪山の背後より不思議の月立てり はじめに月と呼びしひとやは」  
まずあるのは「私」と「月」。次にそもそも夜空に浮かぶ丸いものを月と呼んだ誰かを探している。  
彼女が求めているのは



という三角形がそもそも始まった訳。ものの名をそもそも名として創始した他者。

（２）「私に呼応する君」への憧れそのものの不可解さ

フンボルトによれば人間のあらゆる思考はこの憧れに基づく。では、「自分のことを自分自身と考える」人格意識の思考の場合はどうだろうか。そこに呼応する君は現れるのだろうか。

「この生涯を生きているのは、他ならぬこの私である」という人格意識。

「“この”生涯」や「“この”私」という自己了解を支えているものは＜私＞と＜君＞とで指差せるものではなく、「私は私自身である」という意識。（それを「あれはひまわりだね」「うん」と言うようには学べない）

「私は私自身」ということはフンボルト的憧れの構造では習得不可能。（どんな＜君＞とも共有不可能。君の言う“私”は私にとっては“君”）

「私は私」と言えば言うほど互いの他者性が際立つ。

### ④フンボルトの「ロマンティズム」と現実

われひとり思ふ思ひはかひもなし同じ心に君もあらなむ

相手との対話が必要とされているが、「君への憧れ」とい言葉にも現れているようにそのような相手はなかなかおらず、自らの孤独が引き立つ。

<存在すること>

「何かが存在する」ということと、その何かを名指すこと。これは「存在」と「言語」の連関。

言語には“私と他者の共同性”という問題が絡んでくる。私が何かを発話するとき、それは私が他者に発するもの。他者は“聞き手の二人称”としてプリミティブ（原初的）にはある。この「私と他者との対話」のなかで「存在」が構成される。

▷カフカのテキストから

「私には、自分の生について納得したことなんて一度もなかった。つまり、まわりの物たちに対して何とも頼りない思いしかなくて、この物たちはかつては生きていたにせよ、今はもうどこかへ沈んでいこうとしているさなかのような気がしてならないんです。ねえ、いいですか、いつも私は私に対して現れる以前にこの物たちがあったであろう本来の姿で、物たちを見てやりたくてたまらなくなつて、ひどく苦しくなるんです。物たちはきっとそこでは、美しく静かにしているんでしょうね。そうにちがいない。だって、人々が物たちについてよくそんなふうに話しているのを聞きますからね。」（カフカ『ある戦いの記録』）

生きていることにしっくりこない主人公。一昔自分の周りの物はもっと生き生きしていた気がする。世界が沈み込んでいく気がしてならない。

下線部の原文：

Immer, lieber Herr, habe ich eine so quälende Lust zu sehen, wie die Dinge sich geben mögen, ehe sie sich mir zeigen. (I always think how the things would be given before they show up to me.)

私がここに来る以前にこの花がどうであったか知りたいの。

カフカがここで問題にしているのは、「A:私に対して現れる以前の世界の有様」と「B:私に対して現れている世界」の対立。Aを私は見たいのだが、それはAのBへの転換を表す。

この世界というものは、どこまでいっても“私に現れている世界”に過ぎないのではないか。（どこまで行っても私は私 OR この世界は私の見ている夢という話と似ている）この根源的事実から解放されることへの希望を語っている。

この話を（この世界は私に現れている世界に過ぎない）私は誰に向かって告白可能であろうか。私が、「この世界は私にとっての世界でしかない」と、君に向けて語ることに意味はあるのか？その語りは君にとっては理解不能なものではないのか。

君：いや、そんなことはない。この世界は私にも現れている。

なるほど。そうだ、この世界は私にとっても私に対して現れている世界に過ぎない。

（しかし上での私＝君ゆえ、実は反論になっている）

哲学用語で言うところの「独我論」のパラドクス。

私は他者との対話において世界を構成する（＝他者との共同性）が、同時にまた他者と決して共有できないもの（＝共同性からの阻害）も構成する。

「この世界」「この生」「この私」という“このもの”性。

私がこの世界に生きているそのこと自体は通常の世界構成の仕方とは異なっている。

通常は他者との対話において構成する。

私抜きの世界を経験できないということを、私は誰にも伝えられない。

▷「私に対して姿を現す以前の物たち」を見たい、という欲望

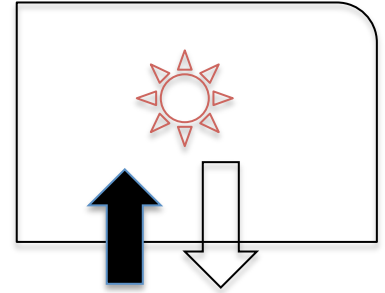
カフカ「ある戦いの記録 – 祈る男の告白」

私に対して姿を現している世界と、私に姿を現す以前の世界の断絶に興味を示す。

しかし「私に対して姿を現す以前の世界」は、私が見たとたん「私に対して姿を現している世界」へと変貌してしまい私の本当に見たいものをみることができない。

“世界はどこまでも私に現れている世界である他ない”という根源的事実から逃亡したいという欲望。

私は部屋にあるものを「部屋の外に出ることが見えなくなるような見方ではない見方で見たい」



通常私たちは X が私に現れていること ≠ X の存在

「≠」の意味。

≠とはいえ、左辺と右辺は無関係ではない。

X を見ることで、あるいは X が見えることが一旦中断されてももう一度見ることができる。

中断を挟んで反復できることへの信念。

(同じ対象について見えることと見えないことが中断を挟んで反復可能である)

X が何度でも現れることが X の存在を意味する。

私が入ったり出たりすることとは独立にものがある。

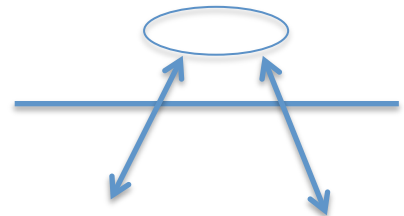
また、他人も入ったり出たりすることができる。

(自分自身を可視性の地平に出入りさせられる限りものはなくなるしない。)

私が可視性の地平に入って見て退出する。

あなたが可視性の地平に入って退出する。

この二人の世界を重ね合わせる。



可視性の地平の比喩的な説明。

上を光・目覚め・生、下を闇・眠り・死としてみる。

私は光の世界に入ったときのみものを見ることができる。しかし、入場前・退出後のことは分からないので見てみたいと思う。

私の入退場とはちょうど逆に入退場する他者の存在をここで考える。

この人は世界をどう見ているのだろうか。

それがここで問題になっている。

ここでカフカのストーリーを思い出してみる。

「人々が物たちについてよくそんなふうには話しているのを聞きますからね。」

「子供の時分、目覚めたときに母がとなりのおばさんに話していた。『そんなに暑いところで何をしているの』、『外でお昼をしようと思うの』どちらも普通の会話でした。」

解釈すると...

起きて目覚めていれば忘れてしまうようなものが、寝ぼけていたため覚えていた。

カフカは目覚めと眠りに注目する人。

起きた私と、眠っている私の不連続が気になっている。  
これはそのまま「可視性の地平」の比喻につながっている。

▷かくれんぼ／だるまさんが転んだ

目隠ししただけで、自分が隠れたと思ってしまう。

二つの遊びに共通するのは「自分が見ていない間の相手の動き」と「相手が見ていない間の自分の動き」を掛け合わせるという点。

自分自身が見る⇔自分自身が見られる

自身が見られるものとして自分を晒しながら私はものを見ている。

cf.ピアジェの発達運動仮説

①感覚運動期

“対象の永続性”／見えなくなる≠存在しなくなるとわかる。

部屋を出たからといってその部屋がなくなるわけではない。

②前操作期

象徴機能の発達。／見立て遊びやごっこ遊びができるようになる。アニミズム的世界。

しかし自己中心性がある。

③具体的操作期

“保存性の概念”（＝算数が出来るようになる）／脱中心化

④論理的操作期

反事実的。仮説的思考が可能になる。

▷「いちはつの花咲きいでて 我が目には 今年ばかりの春 行かんとす」（正岡子規）

カフカと似たような主題を扱っている文学。

私には花が見えたが、これは私が見る最後の花だ。カフカの作中の人物が知ろうとしたのは「もの」を私が見る以前のものの姿。

子規が見たいと思うのは「もはや私に対して姿を現さなくなった後の自然」の姿。

来年の春、再来年の春を誰かは見るが...

可視性の地平を去り、私の後にやってくるものに場を譲る。

可視性の地平から去っていくもの、入るもの、二つの立場を兼ねることはできない悲しみ。

## 2011年度夏学期試験問題

次の①～⑤のなかから2つを選んで、その哲学的意味を解釈し「自己」という概念をめぐる論述を展開しなさい。

### ①～⑤の候補

デカルト、ヴィトゲンシュタイン、ロック、ハイデガー、ヨハネ伝、フンボルト、カフカから5つ授業中に紹介したテキストがプリントには書いてある。

ここで問題になっているのは〇〇という事柄。そして、テキストに自分なりの問題（このテキストでは△△ということが哲学的に問われうる）を発見した上で自分の考えを論述する。

題材のテキスト⇒テキストを解釈しつつ、自己とい概念を巡る問題設定⇒自分の考察を論述評価は相対評価で行われる。

テキストの解釈の仕方が問題の核心を突いていてクリアか、そしてそれに対する自身の発問が正確で、それに対して論理的に解答できているかが大事。

B4版の解答用紙両面一枚。試験時間90分。

準備：

自信を持って解答できるテキストを選択しておく。

テキストそれ自身の客観的な意味・その解釈を手がかりに自分なりの考察を展開できるようにしておくこと。